

断想・日中関係史の光と影

儀我壯士郎
(名が、そういちろう)

忙しすぎる。天も地も日本人も。

一秒のうちに三〇〇〇光回の計算をするのが、スーパーコンピュータの目標となり、内外の関連各社が競争中である。気象調査のため、核融合・核兵器開発のため、ミサイル・宇宙開発のため、新薬開発のためなどといわれるが、真の目的は、何と何であろうか。靖国問題と憲法改正論が政争の重大焦点となり、米軍による自衛隊のM&Aが強制されようとしている現在、忙しすぎるなかで少し落ち着いて、数千年の歴史をもつ日中関係史の光と影を、よかえつてみよう。ちなみに、日米関係史は二〇〇年以内過ぎない。

六〇年余り前には「皇軍必勝」「日本不敗」「神風が吹く」と、日本国民のシリアで侵略戦争を続けていた。①アジア諸国との戦い、②アジアを舞台とするロシアや欧米諸国との戦いである。①の最重要点中国とは、日清戦争、「北清事変」、山東出兵、「満州国策」と「上海事変」、熱河作戦、「盧溝橋事件」と戦いが続く。②ではロシア、ドイツ、フランス、最後に米軍・英軍ははじめは全世界と戦った歴史の経過である。日中関係の影の部分も略述した。「台湾出兵」以後の七一年が最も暗い。

さて、右の部分を除く数千年の日中関係史の内容は、基本的に明るく、日本が中国から多くを学び続けている。中国では、伝説を含む三皇五帝の時代から、治水と保健・医療が重視されてきた。神農や黄帝の医療・医療の開拓者としての位置づけ、禹の治水の業績などは、広く知られている。現在も中国の都市と農村の医療問題、治山・治水・環境問題の重要性は、いまでもない。そして日本では、薬業関係者の「神農祭」が長い伝統をもつ。

秦の始皇帝(紀元前二五九―二一〇年)は、晩年に、不老不死の仙薬を求

多くが集団催眠術にかけられていた。「皇軍必勝神話」が現実の敗戦で崩壊しはじめる。支配層は、朝鮮・台湾を含め、「徳玉砕」しても「国体(天皇制国家体制)維持」が必要とする上意下達で、国民を欺き通そうとした。

しかし、歴史的には、「皇軍必勝」どころではない。すでに六六三年に、百濟の遣臣の要請で派遣された大和朝廷の救援軍は、奇明天皇(文帝)・中大兄皇子(後の天智天皇)の陣頭指揮の下で、唐・新羅の連合軍に敗れ、朝鮮から手を引いた。「白村江」の画期的敗戦である。白村江は、朝鮮南西部の錦江河口付近の古名である。

元寇は、一三世紀後半の蒙古(元)軍の日本来襲である。一二七四年(文永一)年一〇月、志保・対馬を占領した元・高麗軍は、博多付近に上陸したが暴風で退却し、二二八(弘安四)年五―七月来襲の十数万の元軍は、暴風雨もあって殆ど全滅した。しかし、戦争の影響は大きく、鎌倉幕府衰亡を早める一因となった。

豊臣秀吉は朝鮮・明に対する侵略戦争を実行した。一五九二―一五九三(文禄)めて方士である徐福を日本に派遣した。司馬遷は「史記」に、徐福の出发を紀元前二一九年と記している。徐福は、数千人の童男童女、技術者、五穀の種子などを乗せた大船団を率いて渡来した。徐福渡来伝説は、青森から鹿児島まで少なくとも二十数カ所に及び、各地で敬愛され続けている。徐福集団は侵略ではなく、平和的に、すぐれた文明、農工技術や医療・医療の知識を、日本各地にもたらした。

日本からは、七世紀当初から遣唐使が派遣され、隋の新知識を導入し、文化水準向上、大化改新などに影響した。六三〇年からの一三回の遣唐使は大規模で、空海、最澄たちの帰国後の業績などが典型的事例である。入宋し、一一九一年帰国した栄西の茶種の将来など、遣唐使以後も中国から導入は続く。

鑑真和尚の七五三年の来日は、日中関係史上、仏教の律宗、伝来の面にとどまらず、中国の医薬・薬学導入などの面でも、画期的な光栄を放つ。宋代からの朱子学は、明・清代の官学となった。日本でも徳川幕府の官学となるなど封建的支配体制の倫理観と

一五二)年と、一五九七―九八(慶長二―三)年の二度の侵略戦争である。一五九二年、一五九四年の大軍を派遣して漢城(ソウル)を落とし、碧蹄館で明の援軍を破って和議交渉へ。一五九七年交渉決裂し再度出兵。しかし、朝鮮軍と明の援軍に苦戦。水軍も敗退を重ね、秀吉の死により一五九八年停戦協定を結び、将兵は帰還。豊臣家衰亡の重大な歴史的要因となった。

天下分け目の「関ヶ原の戦い」(一六〇〇)年。その島津が、一六〇九年、徳川幕府の許可を得て琉球に侵攻「勝利」し琉球を幕藩体制に組み込んだ。琉球は、明との冊封関係も維持した。

明治維新直後の一八七四(明治七年)、明治政府は、宮古島民が台湾住民に殺害されたことから台湾へ出兵、琉球が日本の版図であると清国に認めさせた。一八七九年の薩摩置県によって「琉球処分」が本格化する。

この「台湾出兵」を「日本の七〇年戦争」(新日本出版社、一九九五年)の起点とする丸山静雄氏の説を重視したい。敗戦までの七一年間、日本はア

しての役割を果たした。日本に帰化した朱舜水の水戸学への影響など、日中関係は多面的である。では、日本は、中国に寄与するところがあつたか。新しいところでは、日清戦争後、中国から多数の留学生が来日した。李大釗、陳独秀、李達、蕭必武、李漢俊、周自齊などの中国共産党創設(一九二二年七月)の中心人物は日本留学経験者である。来日した魯迅と郭沫若、周思来その他も、日本の民主勢力・出版物から多くを学んだ。

「国父」孫文が、日本を辛亥革命・民主主義革命の拠点とし、各界各層の日本人(頭山滿、大養毅、宮崎滔天等々)が、多岐にわたって、孫文を支援したことも、注目される。

日本帝國主義の中国侵略という暗黒のなかで、戦争に反対し、直接間接に中国の革新勢力と連帯した日本の革新・平和勢力も、日中友好史における日本側の光明であった。現在もその協力関係は維持・強化されている。アジア史は、アフリカ史、ラテンアメリカ史とともに、明るさを加えつつある。